

松下国際財団 研究助成

研究報告

(データ送信)

【氏名】工藤 晶人

【所属大学院】(助成決定時) プロヴァンス大学アフリカ・アラブ・トルコ世界研究科

【研究題目】

仏領植民地期アルジェリアと地中海移民ネットワーク
ヨーロッパ系入植者社会の歴史研究を目的としたアルジェリア所蔵史料調査

【研究の目的】(400字程度)

十九世紀の西欧諸国植民地の急拡大によってひきおこされた国際的な人口移動は、国境や民族性が流動化する現代世界の状況の起点となった。従来おもに政治支配の観点から研究されてきた植民地の歴史を、移民・人口移動という視点からとらえなおすことは、現代世界を世界史的視点から考察するうえで重要な課題である。

本研究は、イギリスに比肩する規模をもちながら日本における研究がすくないフランスの植民地の歴史に注目し、そのなかでも最大の入植植民地であったアルジェリアを対象とする。そして、これまでのマクロな分析がとらえてこなかった複雑な「ヨーロッパ系」入植者社会と先住民社会との連関を地域史の視点から考察することをこころみた。

【研究の内容・方法】(800字程度)

アルジェリアにおける植民地期の公文書は、アルジェリア独立戦争(1954-1962)の末期にその一部が当時の宗主国フランスに移送され、現在にいたるまでフランス国内の公文書館に所蔵されている。従来の歴史研究は、主としてこれらフランスの施設に保管された史料類にもとづいてすすめられてきた。一方、独立後のアルジェリアに残された公文書類については、史料の保存状態はもとより、その存在そのものをふくめて情報がきわめて限られていた。しかし近年、アルジェリアにおいて文書館施設の整備が進みつつあり、同国の社会情勢の安定と相俟って、そこに所蔵される史料が各国研究者の注目を集めつつある。

本研究においては、フランスにおける調査(パリ、エクス=アン=プロヴァンス)と平行して、アルジェリアの複数の公文書館において調査を試みた。とくに、これまで詳細が明らかにされていない1960年代の史料移転・遺失について実態の把握を試みた。そして、フランスとアルジェリア両国のアーキビストの協力を得つつ、アルジェリアの公文書館において近年進められている所蔵史料整理の現状を調査した。

つづいて、ここで得られた史料の分析をつうじて、フランス・スペイン・イタリアを中心とする地中海沿岸諸国からアルジェリアへの移民・定住のプロセスを考察した。アルジェリア植民地の移民・入植に関する従来の研究は、主として公式統計のマクロなデータにもとづいてすすめられてきた。本研究においては、国勢調査原簿や選挙人名簿といったミクロなデータの得られる史料を渉猟し、詳細な分析を試みた。また、植民地期アルジェリア特有な「完全施行自治体(commune de plein exercice)」と「混合自治体(commune mixte)」という地方行政制度に注目し、制度と実態の両面から分析をこころみた。これは、都市空間と農村部を比較しつつ、ヨーロッパ人、ユダヤ人、アラブ・ベルベル系ムスリムといった集団相互の、またそれぞれの集団内部における関係変化を、共住形態・生活空間の構造という観点から考察したものである。

【結論・考察】(400字程度)

アルジェリア国立文書館、アルジェ県文書館、オラン県文書館の三つの施設を中心として調査を行い、多数の地図原本や、社会史的分析を行う上で重要な多様な行政文書類などを利用する機会を得た。その結果、アルジェリア独立時の史料の移転について定説とされてきた見解の修正につながる史料学上の発見が得られた。また、ここで得られた史料の分析を通じて、従来の研究において入植者対先住民という単純化された図式でとらえられてきた植民都市・農村部の空間構造が、より複雑で時期的・地域的に偏差の大きいものであったことが明らかになった。